



いのちの水

小久保 正

新緑の季節に希望と意欲に溢れて歩み出しても、木々の緑が濃さを増すにつれ、疲れ、傷つき、歩む勇気を削がれ、うなだれてしまうことが多くなります。その傷口が覆われ、癒され、慰めを見出し、再び歩み出す勇気を与えられることが望まれます。

最近心に残る「いのちの水」(新教出版社、2017年)と題する小さな絵本に出会いました。トム・ハーバーと言うカナダの神学者が書き、中村吉基牧師が訳し、望月麻生牧師が挿絵を描いた本です。

むかし岩だらけの荒野に水が湧き出ている場所があり、旅人たちはその湧水を飲んで力を取り戻していたそうです。その水を飲むと体も心もいやされ、希望と勇気がふたたび強められました。巡礼者たちはこの水を「いのちの水」と呼びました。人々はこの泉に感謝を表すために、石を持ち寄って記念碑を建てました。記念碑はだんだん大袈裟になり、大聖堂になり、周囲を高い壁で囲われました。泉の純粹さを守るために、さまざまな規則が定められ、水を飲む人が制限されました。水を飲むための規則で意見が対立し、頑丈な壁が作られ、泉は完全に覆われ、見えなくなりました。聖所の中では、「いのちの水」が遠い昔に巡礼者たちにもたらした恵みを記念する礼拝が行われていましたが、壁の外では人々がのどの渇きで死に瀕していたそうです。

いのちの水を思う宗教的熱心が、かえっていのちの水を遮断してしまったというの

です。

しかしこの本は、ここで終わっていません。次の言葉を付け加えています。「夜になって静寂が戻った頃、神殿にそっと入り込んで憩いの時をすごしていたごくわずかな巡礼者たちの耳には、ときおり奇跡のような音が聞こえていた。それは巨大な岩で造られた聖堂の礎石の、はるか深い底から聞こえてくる、流水のかすかなこだまだった。そのとき、決まって人々の眼は涙で覆われるのであった」。

この本を日本に紹介したのは、関西学院大学神学部准教授の榎本てる子さんでした。彼女は、エイズ、セクシュアリティ、滞日外国人、薬物依存症などの問題を抱える人の友として歩みました。その彼女がこの本の最後にこう記しています。「いまの私に強く響くのは、『ごくわずかな巡礼者たちの耳に、ときおり奇跡のような音が聞こえていた。それははるか深い底から聞こえてくる流水のかすかなこだまだった。そのとき、決まって人々の眼は涙で覆われるのだった』という箇所です。自分自身の中で、神様と出会った喜びを忘れ、社会にある様々な『問題』に関わるのが中心になり、『私』と『あなた』の出会いを大切にしていなかった自分に気づくことができました。私自身の渇きを潤してくださる神様との出会いによって押し出される者でありたいと願っています」。

彼女は、10年前自ら病を得て、弱っていく肺を抱えながら、最後の一息までキリスト教の枠を超えて、人と人を繋ぐために生き、

(裏面へ)

(表面より)

去る4月25日55歳で地上の生涯を終えました。その姿は、十字架上のイエスを思わしめたと言われています。そのお別れ会は、彼女の遺志により、可能な限り宗教的用語を使わずに、Celebration of Lifeと銘うって行われました。背景の異なる様々な人が、様々な服装で、1200人も集まり、彼女が潤されたいのちの水を受け継ぎました。イエスが語られた言葉が、思い起こされます。

「わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。渇いている者には、命の水から価なしに飲ませよう」(ヨハネの黙示録21章6節) 価なしに、と言われていることが印象的です。経験や知識に頼らず、宗教的条件によらず、何も持たずに、すなおに命の水を受けよ、と言われています。

*****きらら俳句*****

- ・池面より背筋伸ばして花菖蒲 枯骨
- ・雨ひと日モリアオガエルと時過す 茶香
- ・断捨離は口先ばかり心太 小次郎
- ・梅花藻や小さき魚影の見え隠れ 周豊
- ・蟻の列蝶をささげて道よぎる 虚舟
- ・萤火や行き交う人の顔優し 公女
- ・苗代の水澄み里の雲映る 岳
- ・梅雨晴れの夕日に染まる東山 星児
- ・梅雨の間に庭を耕すミミズたち 海楽

ユーモア 5

榎本 栄次

ヤクザの親分という長谷川さんは、「キリストによって罪が許される」という言葉をそのまま単純に理解し、受け入れた。キリスト教についての教義はもちろん、その教えなど何も知らない。教会にも行ったことはないし、聖書を読んだこともない。知っているのは自分がやってきたことの罪深さである。死を前にして、その罪のために死んでくれたキリストのことを知らされた。彼はそれにしがみついた。「ほんまか、ほんまかと」と若僧の私に何度も確かめ、泣きながら喜ぶのであった。牧師の面談を求め、受洗を教会に申し出た。牧師は「それで十分」と病床受洗を授けた。その一週間後、彼は天に召されていた。

まじめに考えていたら受け入れられないような理屈がある。そんな馬鹿な、と怒り出す人もいるに違いない。「笑いが止まりません」と大喜びの者もいるだろう。ここに神様のなさるユーモアを感じてしまう。

長谷川さんは亡くなる前に、世の中のためになる事をしたいと言って、献体の遺志を申し出られていた。処置を終えたご遺体に会わせていただいたのだが、その顔を見て驚かされた。天使の顔もこんなものではと思うような優しい翁がそこにいた。 つづく



関西セミナーハウスの四季だより

モリアオガエル

関西セミナーハウスの茶室には、小さな池があり、2、3匹の金魚が泳いでいる。池を覆うように椿の枝が伸びていて、この時季になると毎年その枝にモリアオガエルがやってくる。天然記念物とされていて珍しい。

小さな卵ほどの大きさで葉と同色なので見つけるのがむづかしい。セミナーハウスの風物詩である。繁殖期になると、まずオスが産卵場所に集まり、鳴きながらメスを待つ。鳴き声は「カララ・カララ」と鳴いた後、「コロコロ」「クックク」と鳴きメスを呼ぶ。池に張り出した木の枝に白い泡を出してその中に卵を産み付ける。約一週間で卵がかえると下の池に落ちてオタマジャクシになる。それを金魚やアカハラが待ち受けている。親カエルを狙って青大将が現れるのも生態系である。オタマジャクシは約一カ月で成長するが、前後の足が生えてカエルになると上陸し、森林で生息する。

ハウスに来られた方が能楽堂や茶室をご覧になると、セミナーハウスのすばらしさに出会われる。今の時期、いろいろな小動物もいて、モリアオガエルもその一つである。 榎本記